楠リッカは冷やしカレードリンク可愛い

トウヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

楠リッカは冷やしカレードリンク可愛い

【Ｎコード】

Ｎ１６６０Ｏ

【作者名】

トウヤ

【あらすじ】

西暦２０７１年。世界はアラガミと呼ばれる『何もかもを喰う』怪物によって、荒廃が進んでいた。生化学企業フェンリルは、アラガミの『オラクル細胞』を武器として利用する事に成功。その武器――神機と、神機を操るゴッドイーターを、アラガミへの対抗策とした。フェンリル極東支部に配属された新型ゴッドイーターは、行方不明になった前リーダーである雨宮リンドウ少尉の後を継ぎ、支部長の特務を受ける事になり……。

「あ……お疲れ様」

エントランスのソファーに腰をかけ、冷やしカレードリンクを片手に、小さく呟く少女。

名は楠リッカという。彼女はフェンリル極東支部の技術員であり、人類の天敵『アラガミ』に対抗する者――ゴッドイーターが扱う生体武器『神機（じんき）』の整備を担当している。

彼女の言葉は、たった今戦場から帰還した新型ゴッドイーター――即ち俺にかけられたものだった。

支部長から要請された特務をこなし、くたくたの状態でリッカの隣に腰を下ろした俺は、無言のまま目蓋を閉じていた。

「……どうしたの？」

何も言わない俺を心配に思ったのか、リッカは小声で俺に囁いた。

心配するな、大丈夫だ――そう言いたい。言いたいのだが……。

過度の疲労のせいか、声が出ない。

こんなに疲れと緊張を感じたのは、行方不明になってしまった前リーダー――リンドウさんと行った緒戦の任務以来だ。

あの時は、アラガミの中では討伐が容易な『オウガテイル』が相手だったが、それでも緊張したんだ。

そして、今回俺に要請された特務の内容――超大型アラガミ『ウロヴォロス』の討伐だ。

普段は部隊の仲間とミッションへと繰り出すが、特務だけは単独でこなせという支部長の命令により、初戦闘のウロヴォロスは一人孤独な戦いだった。

ミッションクリアにいつもの数倍の時間がかかり、手も足も痺れ

て上手く動かせない。

「……悪い」

一言だけ喋るのが、精一杯だった。

そのままエレベーターへ歩き出し、自室へと戻った。

リッカには、明日謝らないとな……。

▽　▽　▽

「昨日の内に討伐報告書を提出しなかったことには目を瞑る。君も疲れていたのだろう？　よくやってくれた。まさか、本当にウロヴォロスを単独で倒すとは、ね……。やはり君には、リンドウくん以上の素質がある。これからも期待しているよ」

翌日――支部長に招致された俺は、昨日の特務について、事細かに聞き出された。

神機に異変はなかったか、ウロヴォロスの討伐は、単独で出来る難易度だったか等々……、身体の疲れがあまりとれていない俺にとって、この質問攻めは普段の任務を行うことより苦痛だった。

「……ところで」

極東支部長のヨハネス・フォン・シックザールは急に改まり、執務用のデスクに両肘をつき、手を重ね合わせ、目を細めた。

今度はどんな特務を受けさせる気だ、と大きなため息が出そうになったが、流石にそれをここで出来る筈もなく、俺は無表情で、彼

の言葉を待った。

「君はこれからも、特務を続ける気はあるか？」

俺の顔をまじまじと見つめた後、急に声のボリュームを上げた支部長。

……そんなことか、と俺は安堵した。勿論相手に内心は透かされぬように。

「どっちだ？」

再び訊いてきた支部長に、俺はやはり無表情で答える。

「アラガミを倒すことが、俺達ゴッドイーターの仕事です」

「……そうか。分かった。では、今後も世界中の人間の為に、尽力してくれ」

「了解です」

「以上だ。今日はゆっくり休んでくれ」

俺は支部長に会釈し、支部長室を出た。

自室に戻った後、俺はベッドにへなへなと倒れこんだ。このまま寝てしまおうか。

せっかくの休日が無駄に……とは思ったが、ゆっくり休むことも重要だと、先輩のブレンダンさんやリッカに言われた。

あ……リッカと言えば、昨日のこと謝らないと、な。

よし。急遽予定変更だ。寝るのはナシ。
俺は部屋を出ると、彼女の仕事場である神機整備室へと向かった。

▽　▽　▽

「え、リッカさんですか？　さっき出て行きましたよ。休憩時間ですから」

リッカの同僚らしき少年に彼女の行方を尋ねるも、どこに行ったかは分からないと返された。

「そっか、ありがとう」

俺は神機整備室を出ると、病室や研究室などが備わっている区画『ラボラトリ』に移動した。
リッカを探しに行ったわけではなく、喉が渇いたからだった。ラボラトリには自販機が設置されていて、くつろげるスペースが用意されているのだ。
一服したら、探しに行こう。休憩時間は、まだまだ残っている筈……と、思った矢先――自販機の前で冷やしカレードリンクを大量に買っているリッカの姿が目に入った。
休憩中故か、彼女がいつも身に付けている革の手袋はどこにも見当たらず、綺麗で柔らかそうな手がさらけ出されていた。……何言ってんだ俺。

「……あ」

俺の存在に気づいたリッカは、さほど驚いた様子もなかった。

慌てて俺は、彼女に昨日のことを謝罪し、頭を下げた。
怒られる、かと思いきや、リッカは優しく微笑んでいた。

「いや、気にしてないってば。……君ってさ、ミッション終わって帰ってきた後、よくあたしに話しかけてくれるじゃん。昨日は、あたしから話しかけても返事出来なかったんだよね。それって、喋れる元気すらないって状態だったってことでしょ？」

「あぁ。恥ずかしながら、戦闘でかなり疲労して、まともに喋れなかったんだ。……俺、曹長に任命されて、調子乗りすぎてたっぽいな。改めて、これまで特務を受けていたリンドウさんを凄いって思うよ」

「……やっぱり大変なんだね。これ、どう？」

リッカが差し出してきたのは、まだ未開封の冷やしカレードリンクだった。

「遠慮しとく」

俺は苦笑して小さく首を振った。
以前、同期のゴッドイーターである藤木コウタにこれを勧められ、飲んでみたところ吐き気を催したことがあるのだ。

「ふぅん。こんなに美味しいのに」

リッカは不思議そうに、冷やしカレードリンクの缶の蓋を開け、ごくごくと飲み始めた。
……カレーは飲み物じゃねぇぞ。ましてや冷やしたカレーなんて。
味覚は人それぞれだと言うが、彼女のそれは随分と変わっている、

と思う。
　それにしても、リッカの足元に置いてある、袋に入った十数本の缶が気になって仕方がない。思い切って訊いてみよう。
「……リッカ。そこの大量にある冷やしカレードリンクは一体……？」
「あ、これ？　休憩中に飲もうかなぁって。残念ながら、同僚にも先輩にも美味しいって同意してくれる人がいないんだけどね」
「いや、当然だと思うが……。そんなに美味いのか？」
「ん、まぁね。三食の主食にしてもいいくらいだよ」
「こ、これをか？」
　朝昼晩の主食が冷やしカレードリンク。想像するだけで、吐き気がした。
　俺が今まで考えていた整備士リッカさんのイメージが凄まじいスピードで崩れていっている気がする。
「……あのさ」
　トンデモ味覚なイメージが定着したリッカが、急に俺と目線を逸らした。
「どうした？」
「昨夜ね、君の神機を見さしてもらったんだ。そしたら、凄く傷が付いてて……。前にあたしが送ったメールあるでしょ？　あれから

君の神機、凄く使い込まれるようになってて、嬉しかったんだ」

リッカから俺に送られてきたメール――というのは、俺がまだこの極東支部に配属されたばかりの時にあった話だ。

俺はアラガミが怖くて、奴らの攻撃を正面から受けることが出来なかった。いつも避けることだけを考えていて、それが裏目に出たこともあった。

そんな時、リッカが送ってきたメールを見て、このままではいけない……そう思ったのだ。

――君の使ってる装甲……、他の神機使いのと比べてかなり傷が少ないような気がするんだけど、ちゃんとガードしてる？

――神機を傷付けてほしいわけじゃないけど、ちゃんとガードも使わないとだめだよ？

あのメールを見た時、俺は恥ずかしくなった。

装甲の意味がないじゃないか、と自分自身に説教をした。

それからは、俺は装甲なしでは逆に戦うのが怖くなり、回避と防御を両立する戦い方を学ぶことが出来た。昨日のウロヴォロス戦でも、装甲が大活躍してくれたのだ。

リッカは俺の命の恩人、と言ってもいいくらいである。

「……だからさ。これからも、神機を大切にしてね……」

「ありがとう」

俺は恩人である彼女の手を握り、そう言った。

「え……えっ？」

いきなり手を握られたこと、お礼の言葉に混乱したのか、リッカの視線は、繋がれた手と手、そして俺の顔を激しく行き来した。
おまけに、リッカの頬はあからさまに紅潮していた。……やっぱり女の子だ。

「あ、あぁあのっ、い、いきなりどうしたのっ？　仕事してたから、あたしの手汚いよっ？」

「……綺麗だ」

「へっ？　ちょ、ちょっと……、こんな大胆に……」

「こうしろって、本能が言うんだ」

「えっ、あ、あのっ、意味が……」

「……とにかく、リッカが怒ってなくてよかったよ。しかも、意外な一面も見れたしな。今までクールなイメージが強かったけど、リッカ可愛いわ」

「あぅ」

次の言葉が出ないのか、リッカは顔を真っ赤にして俯いてしまった。
流石にこれ以上手を出す気にはなれず、俺は手を離した。

「……ば……ばか」

リッカは大量の缶入り袋を片手に、その場を立ち去った。一缶、未開封の冷やしカレードリンクを置いて。

「おいおい。どうすんだよこれ」

缶をじーっと見つめてみる。

その後、俺は何を思ったのか、缶を開けてしまった。

「どれどれ……。おぇっ、不味いわッ！」

とは言いながらも、俺はこの不気味なドリンクを、頑張って一気飲みした。

荒い吐息を整えながら、ビン缶用のごみ箱に、空の冷やしカレードリンクを投げつけ、自室へ戻ろうとエレベーターのボタンを押した。

今度こそ、寝よう。

▽　▽　▽

「あれ、リッカさんどうしたんスか？」

「……分かんない。なんか、なんというか……胸が苦しいんだ」

「えぇっ、その胸で、その胸で苦しい！？　太ったんじゃ――――ぎゃあァッ！」

「顔が熱いわ……。ごめん、ちょっとあたし休憩とるね」

（次……どんな顔で彼に会えばいいんだろ……）

（後書き）

結論：リッカは可愛い

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1660o/

楠リッカは冷やしカレードリンク可愛い

2010年10月18日15時48分発行